==========

2024 年度武田知己ゼミナール

沖縄合宿報告書

～「日本近現代史と沖縄」研究の一年～

（2025 年 2 月 19－26 日）

==========

武田知己（大東文化大学法学部教授）

ttakeda@ic.daito.ac.jp

ゼミ室にて（ゼミ最終日）

2024 年度所属学生：川崎　直輝、永井　里佳、前田　篤利（以上、4 年生）

秋山　翔哉（合宿不参加）、菊池　優捺、鈴木　柊万（合宿不参加）

福島　伊織、武藤　俊介（以上 3 年生）

はじめに

私は、2004 年度（2004 年 4 月 1 日）に本学に赴任したので、今年度、2024 年度は、ちょうど 20 年目の節目の年でした。2023 年度は、在外研究の機会を得て、ポーランドと台湾に行きました。日本に帰国したら、何かしら区切りをつけ、学生と何か新しいことをしようといろいろ思いを巡らせておりました。

帰国直前に出した答えは、二つでした。一つは、学生と一緒に改めてたくさん本を読むことと政治や歴史を学ぶための手触りをたくさん感じてもらうことでした。もう一つは、沖縄と福島とに焦点を絞ったゼミを、二つ、単年度で持つことでした。

そう考えた理由は、まず、二つの異なる地域にいて、世界中が大きく変わっていることを実感したからにほかなりません（私が何を感じたかは、財団法人櫻田會のウェブサイト（https://www.sakuradakai.jp/）にある拙稿「ポーランドだより」「台湾だより」をご覧ください）。在外研究の最後のころ、キャロル・グラックという著名なアメリカの日本研究者が、シンポジウムで、今から数百年ののち、未来の歴史家はこの時代を第二のルネッサンスと呼ぶのではないか、と言ったのを聞いた時、まったくその通りだと思いました（東北大学統合日本学センター開設記念講演、2024 年 3 月 5 日）。

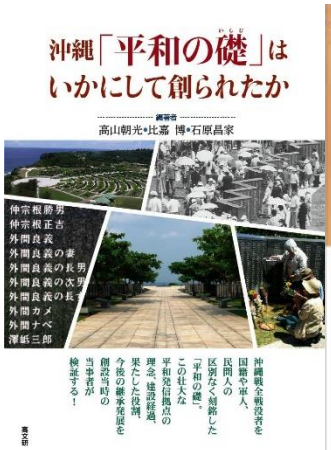
そのような時代に、私と一緒にゼミで勉強してくれる学生に何を伝えるべきか。私は真剣に考えました。答えは、「基本的知識」と「想像力を養う実感」だろうと思い至りました。それは、事実を正しく認識するために必要なことです。そして、それが本当に難しいことを、私は日本政治や外交史を学んでいて――日本政治の過ちとして――痛感しています。しかも、私は、本や新聞を毎日読み続ける地道な努力や自説の修正に次ぐ修正（これを「研究」と言います）を通してしか、それは手に入ないと感じました。学生にもその経験をしてほしいと思ったのでした。

そして、もう一つの理由は、私が 50 代も半ばになり、いろいろなところを飛び回れるのもあと数年だということでした。その間に、「沖縄」と「福島」という、私の 40 代になってからの新しい研究フィールドについても、自分なりに何らかのまとめをしたいと思ったのですが、それらはすべて大東文化大学の学生とともに始めたプロジェクトでした（これについては、拙稿「アクティブラーニングは政治学教育にどのように役立つか(1)（2・完）：大東文化大学法学部政治学科の事例(2015-2022)を通して」『大東文化大学教職課程センター紀要』5 号、7 号、2022 年、2024 年をご覧ください）。ですから、それをまとめる作業も、学生たちとともにおこなうことが自然だろうと思ったのです。

2024 年度のゼミ生は、そのような私の仕事の一つに共感してくださった方々です。8 名の皆さんと一緒に一年間の勉強ができたことはこの上ない喜びでした。

特に、2015 年（45 歳の時）に初めて足を踏み入れた沖縄は、ポーランドで見たユダヤ人の強制収容所を通してみた第二次世界大戦の歴史、またドイツに占領されたポーランドがワ

ルシャワ蜂起（1944 年 8 月 1 日―1944 年 10 月 2 日）後、解放軍と期待したソ連に占領されていく歴史とどこか重なって見えました。このようなイメージが正しいのかどうかは、まだ、わかりません。しかし、私は大国政治の下で、その歪みの中で苦しむ小国や地域への視線が、歴史を立体的に理解する方法として重要だと体感したつもりです。そのことを私なりの「実感」として、沖縄をとらえ直す仕事をしていきたいと考えています。



今年、皆さんとは、前期に高山朝光他『沖縄「平和の礎」はいかにして創られたか』（2022 年）を読み、「NHK スペシャル　沖縄　“出口なき”戦場　～最後の 1 か月で何が～」（2020 年）を見ました。後期は、波多野澄雄他『決定版　大東亜戦争』上下（2021 年）からいくつか重要なものを読み、大田昌秀編『決定版　写真記録　沖縄戦』（2014 年）も勉強しました。残念ながら二人の学生がやむを得ず欠席しましたが、長い合宿も成功裏に終わりました。その記録が本報告書です。中にある通り、合宿では、ご参加くださった名城大学の矢嶋光先生のゼミ生から、『鉄の暴風』（1950 年初版）について報告を拝聴する機会に恵まれました。

その直後に、ひめゆりや平和の礎を訪問できたことは、一生忘れられない思い出となるでしょう。また、私のゼミと政治学インターンシップの OB/OG g は四人も参加してくれました。矢嶋先生とゼミ生の三人のかわいい学生さんたち、それと四人の素敵な先輩たちに、心からの感謝を送ります。

私のゼミ生には、この一年の記憶を、ぜひ大学時代の思い出として、心のどこかに残してほしいと思います。一生に一度の学生生活で、私は、学生に何を学ぶべきなのか、どう学ぶべきなのかを伝えているつもりです。ゼミに入るということは、友人（今回は新しくできた他大の友人を含め

て)、そして先輩から、どう学ばせてもらっているのかまで、学ぶことになります。ゼミでは最初は知らない学生と、合宿では他大や自衛隊の皆さんなどと、いやいやながらの共同作業をそこかしこでさせられたかもしれません。しかし、後年、それによって皆さんの世界が一回り広がったことを実感してくれるはずです。

この一年の活動を通して、皆さんが、戦後 80 年を迎えてさらに大きな変動を迎えるであろうこの時代を、誰よりもほかの人よりもたくましく、よりよく生きていくヒントをみつけてくれたなら、日本と世界に、私は良い若者を送り出したと胸を張って言えます。本報告書が、皆さんの将来において、ささやかであっても何かを与えるよすがとなればうれしく思います。

2025 年 3 月 19 日

武田　知己

目次

はじめに　・・・・・　武田　知己
１．沖縄合宿要領　・・・・・担当：前田　篤利
２．沖縄戦の概要　・・・・・担当：鈴木　柊万
３．ダイビング体験（2025 年 2 月 22 日）　・・・・・担当：武藤　俊介
４．名城大学との懇親会（2 月 22 日）　・・・・・担当：川崎　直輝
５．勉強会：「『鉄の暴風』（沖縄タイムズ社、1950 年）を読む」（2 月 23 日）
・・・・・担当：永井　里佳
６．キャンプコートニー視察（2 月 23 日）　・・・・・担当：前田　篤利
７．遺骨収容活動初日（2 月 24 日）　・・・・・担当：福島　伊織
８．遺骨収容活動 2 日目（2 月 25 日）　・・・・・担当：菊池　優捺
９．ひめゆり平和祈念館・平和の礎（2 月 25 日）　・・・・・担当：川崎　直輝
10. 沖縄そばの会　・・・・・担当：川崎　直輝
おわりに：ゼミ長から一言

＝＝＝

１．沖縄合宿要領　　　　担当：前田　篤利

＝＝＝

期間：2 月 22 日〜2 月 26 日

参加者：大東文化大学 武田知己ゼミ（2025 年度）＋名城大学 矢嶋光ゼミ＋遺骨収容活動 OB・OG 会

1.1　大東文化大学　武田知己ゼミ参加者名簿：８名（順不同）

氏名	行き	帰り	宿泊場所
武田知己先生	2 月 19 日　ANA469 10:25（羽田）→13:25（那覇）	2 月 26 日　ANA470 15:10（那覇）→17:25（羽田）	月桃
前田篤利	2 月 21 日　ANA477 15:25（羽田）→18:20（那覇）	2 月 27 日　ANA1208 14:25（那覇）→16:05（福岡）	月桃
武藤俊介	2 月 21 日　solaseed 14:00（羽田）発 →（那覇）着	2 月 26 日　ANA 15:10（那覇）発 →（羽田）着	ホテル ストレータ那覇
永井里佳	2 月 21 日　ANA477 15:25（羽田）発 →（那覇）着	2 月 26 日　ANA468 14:15（那覇）発 →（羽田）着	GRG ホテル那覇
菊池優捺	2 月 24 日　ANA477 15:25（羽田）→18:20（那覇）	2 月 26 日　ANA464 12:20（那覇）発 →（羽田）着	グランコンソルト那覇
秋山翔哉	2 月 21 日　solaseed 13:10（羽田）発 →（那覇）着	2 月 26 日　solaseed 15:45（那覇）発 →（羽田）着	月桃
福島伊織	2 月 20 日　ANA1095 16:25（羽田）発→19:20（那覇）着	2 月 26 日　ANA996 13:15（那覇）発 →（羽田）着	月桃

川崎直輝	2 月 21 日　JAL987 14:25（羽田）発 →（那覇）着	2 月 26 日 ジェットスター 18:30（那覇）発 →（羽田）着	月桃

1.2　**名城大学　矢嶋光ゼミ参加者：４名（順不同）**

氏名	行き	帰り	宿泊場所
矢嶋光先生	2 月 22 日 14:40 那覇着	2 月 26 日 18:00 那覇発	OMO5 沖縄那覇
高須綸香	2 月 22 日 14:40 那覇着	2 月 26 日 18:00 那覇発	OMO5 沖縄那覇
福安愛華	2 月 22 日 14:40 那覇着	2 月 26 日 18:00 那覇発	OMO5 沖縄那覇
藤岡梨緒	2 月 22 日 14:40 那覇着	2 月 26 日 18:00 那覇発	OMO5 沖縄那覇

1.3　**遺骨収容活動 OB・OG 会の参加者**

三澤　輝之

田島　七星

芹澤　優仁

田中　柊麻

1.4　**日程**

2025 年 2 月 19 日（水曜日）～21 日（金曜日）

・19 日 13:25 武田沖縄入り

・20 日 19:20 福島沖縄入り

・21 日その他のメンバー順次沖縄入り

※来沖後は各自自由行動

2 月 22 日（土曜日）:「懇親会」

・8:00～17:00 武田は遺骨収容に参加

・9:00 スキューバダイビング集合場所に集合（前田、川崎、武藤、秋山、福島）==16:00 までスキューバダイビング体験

・19:00 に名城大学との懇親会（担当:福島、川崎）

※懇親会前までは各自自由行動

※スキューバダイビング体験企画会社:カイザーマリンクラブ
https://www.kaizarmarine.com/
※懇親会会場: 「郷土料理 ここ」（沖縄料理、居酒屋）098-866-5255　沖縄県那覇市松尾2-1-27　https://tabelog.com/okinawa/A4701/A470101/47000325/

2 月 23 日(日曜日)：「勉強会&Camp Courtney の視察」

・8:45 県庁前集合＝＝9：00 勉強会会場 11：00＝＝11：15 勉強会終了＝＝11：25 米海兵隊 Camp Courtney 移動（田中、矢島、武田カー）12:10＝＝12：25 コートニー視察（調整中）16：00＝＝16：25 アメリカンビレッジ視察（調整中）18:00==19:00 県庁前にて解散
※勉強会会場:那覇の貸し会議室 みんなの貸会議室那覇泉 https://minnanospace.com/naha-izumizaki-space/?_ga=2.9438197.1762716993.1737191140-1036006424.1736950548
※勉強会会場からコートニーまで移動（53 分と想定）
https://maps.app.goo.gl/kjDwEkL2m1WW5pyp7?g_st=il

2 月 24 日：「遺骨収容 1 日目」

・6:45 県庁前集合 7:00==移動（田中、矢島、武田カー＋OBOG？）==7:30 沖縄南部＝＝7:50＝＝8:00（着替えを済ませて集合）遺骨収容開始（お昼休憩あり）＝＝17:00 遺骨収容終了＝＝17:30 移動（田中、矢島、武田カー）==18:30 県庁前解散
※集合場所や服装に関しては下記＜遺骨収容について＞を参照
※県庁前から集合場所への移動時間について 30 分を想定
https://maps.app.goo.gl/VnXt9jWH9sSSxHDz7?g_st=ic

2 月 25 日：「遺骨収容 2 日目」

・6:45 県庁前集合 7:00==移動（田中、矢島、武田カー＋OBOG？）==7:30 沖縄南部＝＝7:50＝＝8:00（着替えを済ませて集合）遺骨収容開始（お昼休憩あり）＝＝14:00 遺骨収容終了==14：30 移動（田中、屋締め、武田カー）
※「沖縄そばを食べに行く会」を開催予定（自由参加）

2 月 26 日：「帰宅」

・各自フライト時間に注意しながら自由行動

1.5　遺骨収容活動について

1.5.1　作業場所について

・場所: ××市××駐車場（沖縄県××市××）
・集合時間: 7:50
・作業時間: 8:00～17:00

1.5.2　服装 ／ 持ち物

・２月の沖縄の平均気温は、例年最高気温が約２０度、最低気温が約１５度です（最低気温

が１０度を下回る日もあります)。また風が強く吹く日には､気温よりも体感温度が低くなるため寒いと感じることもあります。また雨天でも作業する場合があり、濡れることもあります。これを目安にご準備下さい。
※草むらや斜面を歩き回ったり､洞窟でも調査したりする予定です｡また､雨でも作業する場合もあります｡泥だらけになることを前提にご準備下さい。
※様々な状況に対応できるよう記載以外にもご準備をお願いします。
・長袖　・長ズボン　・運動靴やトレッキングシューズ
・軍手　・タオル　・強力なヘッドライト､もしくは懐中電灯
　※ヘッドライト推奨
・リュックサック
※危険防止のため､手には何も持たないでください。
（あったら良いもの・必要に応じて）
・蚊よけ　・サングラス　・帽子　・雨具
・電子機器の防水　・発掘道具 ※以下の「参考」を参照下さい
・電池の予備 ※ライトは１日使用すると電力を消費します｡毎日電池を交換する人もいます。

1.6　合宿報告担当

※担当者は、A4 で 2 枚以内で各担当の写真入り報告（視察場所の住所、連絡先、概要、お世話になった人の名前、場所、写真、感想を含む）を 2 月中に書くこと
前田：要綱作成　2 月 23 日コートニー
川崎：2 月 22 日宴会、2 月 25 日ひめゆり等視察、沖縄そばの会
武藤：2 月 22 日ダイビング
永井：2 月 22 日午前中勉強会
福島：2 月 24 日遺骨収容活動（1 日目）
秋山：アメリカンビレッジ、2 月 26 日の様子
菊池：2 月 25 日遺骨収容活動（2 日目）

1.7　費用について

名前	レンタカー代	空援隊寄付金	懇親会費用	ガソリン代	貸会議室代	17 ドル	合計
武田先生	3459	0	6000	950	580	2573	13562
前田	3459	1000	6000	950	580	2573	14562
川崎	3459	1000	6000	950	580	2573	14562

武藤	3459	1000	6000	950	580	2573	14562
永井	3459	1000	6000	950	580	2573	14562
秋山	3459	1000	6000	950	580	2573	14562
福島	3459	1000	6000	950	580	2573	14562
菊池	1500	1000	0	500	0	0	3000
矢嶋先生	0	1000	6000	0	580	2573	10153
高須	0	1000	6000	0	580	2573	10153
福安	0	1000	6000	0	580	2573	10153
藤岡	0	1000	6000	0	580	2573	10153
三澤	3459	0	0	950	0	2573	6982
田島	1500	0	0	500	0	2573	4573
芹澤	3459	0	0	950	0	2573	6982
田中	3459	0	6000	950	0	2573	12982
合計	37590	11000	72000	10500	6380	38601	176071
合計	37590	11000	72000	10500	6380	38601.45	176071.45
人数	10	11	12	15	11	15	
1 人	3759	1000	6000	700	580	2573.43	

レンタカー代とガソリン代は、参加日数が少ない方は減額しその分を他の方に振り分けています。

※レンタカー代計算方法（乗車日数が 1 日の方は 1500 円）

37590−3000＝34590 円　34590÷10＝3459 円

※ガソリン代計算方法（乗車日数が 1 日の方は 500 円）

950×10＝9500 円　9500＋500×２＝10500 円

※レンタカー代＋ガソリン代は大東文化大学についてのみの計算です。

1.8　宿泊地・視察先等

・民泊月桃

所在地：　〒900-0014 沖縄県那覇市松尾１丁目１６−２４　098-861-7555

・グランコンソルト那覇

所在地：　〒900-0014 沖縄県那覇市松尾１丁目１８−２５　098-860-5577

・GRG ホテル那覇

所在地：〒900-0032 沖縄県那覇市松山 2-16-10　098-868-6100

・ホテル ストレータ那覇

所在地： 〒900-0013 沖縄県那覇市牧志１丁目１９−８ ホテルストレータ那覇 098-860-7400

＝＝＝

２．沖縄戦の概要　　担当：鈴木　柊万

＝＝＝

沖縄戦は、第二次世界大戦における重要な戦闘の一つで、1945 年 4 月 1 日から 6 月 23 日までの約三ヶ月間にわたり、アメリカ合衆国と日本帝国の間で行わた。この戦闘は、太平洋戦争の中で唯一日本の本土で行われた地上戦であり、その結果日本軍は沖縄で民間人を含めた犠牲者を多く出した。

1945 年、連合国は日本本土への侵攻を計画しており、その前哨戦として沖縄の制圧が必要とされていた。沖縄は日本本土に最も近い主要な島であり、アメリカ軍にとっては戦略的に重要な拠点であった。沖縄の占領により、アメリカ軍は日本本土への攻撃を容易にし、また補給ラインの確保が可能になると考えられていた。日本軍は沖縄を本土防衛の最後の砦とし牛島司令官率いる第 32 軍を沖縄に設置した。

日本側は沖縄を守るために、徹底的な防衛体制を敷き、沖縄の住民や兵士たちは、最後まで戦って日本本土を守る覚悟を決め日本軍の指示に従い米軍と闘った。日本軍は、島全体にわたる防御陣地を構築し、住民を巻き込んだ民間人防衛戦術も採用した。

1945 年 4 月 1 日、アメリカ軍は沖縄への上陸を開始した。この作戦は約 18 万人のアメリカ兵が参加し、アメリカ軍は、まず海上からの艦砲射撃や航空攻撃を行い、敵の防衛線を削減した。その後、アメリカ軍は沖縄本島の南部に上陸し、激しい戦闘が始まった。

上陸初日から日本軍は激しい抵抗を示し、特に沖縄の南部においては市街戦が展開された。日本軍は、有名な「鉄の暴風」と呼ばれる戦術を駆使し、アメリカ軍に対して激しい攻撃を行った。日本兵は、山や洞窟を利用して隠れ、奇襲をかける戦法を展開した。

沖縄戦は、戦闘が非常に厳しく、双方に大きな損害をもたらした。アメリカ軍は、兵士の数や物資の面で優位に立っていたが、日本軍の頑強な抵抗に苦しんだ。特に、沖縄の住民が戦闘に巻き込まれ、多くの民間人が犠牲になったことは、この戦闘の特徴の一つであると言える。

日本軍は、組織的な抵抗を続けたが、次第に物資が不足し、士気も低下していった。アメリカ軍は、優れた兵器や航空支援を駆使し、徐々に日本軍の防衛線を突破していた。特に、5 月にはアメリカ軍が南部の主要都市である那覇を制圧し、その後も北上を続けた。沖縄戦での民間人の犠牲は非常に大きく、推定で 10 万人以上の住民が亡くなったとされている。日本軍は住民に対して戦闘に参加するよう求め、また、アメリカ軍の攻撃を避けるために山や洞窟に隠れるよう指示した。その洞窟では民間人が日本兵に殺されるなど、多くの民間人が戦闘の渦中に巻き込まれ、避難することもできずに命を落とした。

さらに、住民は食料不足や医療の欠如といった問題にも悩まされており非常に劣悪な環境でアメリカ軍から逃げることになっていた。沖縄戦は、1945 年 6 月 23 日に牛島司令官が自決し日本軍の戦略的戦闘は終了した。しかし、戦闘の激しさと民間人の犠牲の大きさは、非常に大きいものであり戦争の悲惨さを強く印象づけた。沖縄戦は、日米軍だけでなく、市民にも多大な影響を与え、戦後の沖縄の復興や歴史認識に大きな影響を及ぼした。

終戦後は太平洋戦争、沖縄戦終結 50 周年として 1995 年に糸満市摩文仁に平和の礎を建設した。これには沖縄戦で亡くなられた国内すべての犠牲者に追悼の意を表し「戦争体験の教訓の継承」「戦没者の追悼と平和祈念」「安らぎと学びの場」を基本理念とし、世界の恒久平和を祈念してつくられた。

＝＝

（感想）今回の武田先生のゼミに参加させていただき、今まで沖縄戦について教科書でしか学んでいませんでしたが、このゼミを通して沖縄戦の当時の方々の日本軍側からの視点、米軍側からの視点また、住民から視点からこの戦いについて学ぶことができました。これによって高校までの表面上の知識ではなくより詳細なデータや記録を基に沖縄戦とは何なのかと自分の中で答えを見つけることができ、非常に実りのあるゼミの活動となりました。まだまだ寒い日が続きますが、どうかお体には気を付けて武田先生のさらなるご活躍を祈念しております。一年間ありがとうございました。

＝＝

３．ダイビング体験（2025 年 2 月 22 日）　　**担当：武藤　俊介**

＝＝

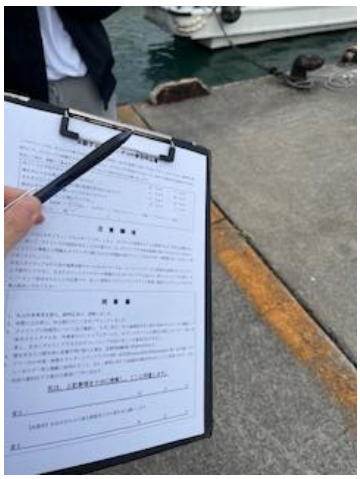
はじめに

2025 年 2 月 22 日午前 9 時、私たちは県庁近くのおきなわ屋に集合し、今回スキューバダイビングを体験させてくれるカイザーマリンクラブの迎えを待ちました。車に乗り那覇の小さな港に着きました。20 人ほど今回のダイビングに参加する観光客が集まっていました。ほとんどが中国人か韓国人の観光客でした。料金を支払った後、ダイビングに関する同意書を書き船に乗りました。数分後、乗組員の方々から説明があり船は出航しました。

これが、到着した港です。すでに外国人観光客が到着しており、船の近くは賑わっていました。注意事項が記載されている同意書にサインして乗り込みます。船と陸

の間隔が広く乗り込むのが大変でした。

船が出航すると、陸がだんだん離れていきます。陸がほとんど見えなくなり、海の色も変わり、波が激しくなるあたりから気分が悪くなる人が出てきた印象です。事前に酔い止めを飲んだのですがそれでも気分は良くは無かったです。まっすぐ立つのが難しいくらい船は揺れました。



３．１　ホエールウォッチング

今回のプランにはホエールウォッチングが含まれていました。センサーで鯨の場所を探し、船は向かいました。実際見ることができるか不確かといわれたのですが、今回は行きと帰りの両方で見ることができました。

水面に上がってきた数秒しか見るタイミングがありませんでしたが、その姿を何回も見ることができました。写真で撮るのは難しく常にカメラを回していました。

３．２　スキューバダイビング

今回の目当てであるスキューバダイビングです。自分自身は泳げないし、ダイビング自体も初めてでした。事前にインストラクターの人から説明があり、器具や酸素ボンベの使い方をレクチャーしていただきダイビングに臨みました。

1 枚目は、今回スキューバダイビングをするにあたり島に向かった時のものです。神山島と呼ばれる離島。波は穏やかで海も透明感があり神秘的でした。今回の沖縄合宿では、離島観光は無かったが、次に個人で観光に来る時は離島の観光も計画に入れたいと思うくらいには静かできれいな場所だった。

2、3 枚目は、水深 5 メートル位の写真です（正確にはわかりません）。浅いように感じるが水圧で耳が痛くなり、すぐには上がれないため「溺れたらどうしよう」という恐怖心が生まれました。しかし、慣れてくると恐怖心も薄らぎました。水中ではいろんな魚が泳いでおり、目の前で魚が泳いでいるというなんとも不思議な感覚でした。水中は思ったほど身体の自由が利かず先導する人について行くので精一杯でした。

＝＝

（感想）スキューバダイビングは初めての経験でしたが今回の合宿の計画に入れて良かったと思えるくらい楽しい時間でした。沖縄の海の美しさを身をもって実感しました。今回の合宿の思い出をより良いものにさせてくれました。

＝＝

４．名城大学との懇親会（2025 年 2 月 22 日）　　**担当：川崎　直輝**

＝＝

開催場所：郷土料理ここ　沖縄県那覇市松尾２丁目１－２７　090ー866ー5255
二代目ふみ坊亭　沖縄県那覇市安里 388—1　090—885—3055

２月２２日名城大学、大東文化大学が合同でゼミ活動を行うにあたって仲を深める為に懇親会を「郷土料理ここ」で開催しました。OB も含め１１人で沖縄料理、三線を聞きながら楽しい時間を過ごしました。その後二次会を二代目ふみ坊亭で開催し思う存分楽しみました。

違う大学とのゼミ活動なので不安でしたが、仲を深めることができました。オジー自慢のオリオンビールの際に何度も乾杯を行ったり、曲に合わせて手を叩いたり盛り上がってとても楽しかったです。海ブドウ、ジーマーミ豆腐を始めとする沖縄料理の数々、三線も生演奏は、沖縄初心者にとってなかなか普段出来ない経験になっていると思うので仲を深めると同時に沖縄を生で感じられてとても良い懇親会でした。ハブ酒を始めて飲む方も多く店員さんもフレンドリーで酔った勢いもあり面白い会になりました。

＝＝

５．勉強会：「『鉄の暴風』（沖縄タイムズ社、1950 年）を読む」（2 月 23 日）

担当：永井　里佳

＝＝

開催場所：那覇の貸し会議室　みんなの貸会議室那覇泉崎店 503 会議室

：〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎１丁目１３−３　資格の大原沖縄校ビル内

今回、名城大学との合同での勉強会を企画した。『鉄の暴風』という書籍を題材にした内容であった。勉強会は司会進行の大東文化大学教授武田知己によって進められ、『鉄の暴風』の報告は名城大学の学生 3 名が行い、書籍で取り上げていた【本書の概要】・【軍の動き】・【住民、知事らの動き】・【ひめゆり学徒隊の動き】を中心に報告した。要約しまとめた報告内容は以下の通りである。

本書は、米軍上陸から日本守備隊が潰滅し去るまでを住民の動き、非戦闘員の動きを重点において執筆されている。米軍の動きは 3 月下旬から始まっており、4 月 1 日に沖縄半島上陸し城間等で戦闘を行ったが５月 31 日には首里城占領されるといった日本軍が追い込まれる結果になった。6 月 21 日には南部の真栄里の線で決戦が続いたが、23 日に司令官であった牛島満が自決をしたことで沖縄半島の組織的戦闘は終結した。日米損害を比較すると沖縄県民の戦死者は米軍戦死者･行方不明者の 11 倍である 14 万人である。その後、沖縄戦下の新報社・当時の沖縄知事の島田叡・中頭地方事務所長伊芸徳一の動きを、地図を用いて解説していた。後半の報告ではひめゆり学徒隊を中心に取り上げていた。3 月 24 日に県立第一高等女学校の生徒は陸軍病院付きとして従軍することになり、南風原陸軍野戦病院に向かって出発することになった。戦闘が進むにつれて負傷兵が増え女学生が取り巻く環境は劣悪な環境に次第に変わっていき、女学生も多数の犠牲者が出て

きた。5 月 26 日に野戦病院は南風原を撤収し南端の真壁村に移すことになった。しかし 6 月に入ると本部からの命令により女学生たちの動員が解かれたが、この時期から米軍の捕虜になり米軍に射殺されたりなどといった、日本に大きな被害が遭う結果になった。終戦後は、沖縄戦で亡くなった全ての女学生の霊魂を供養するためのものとして、女学生含む多くの戦死者が出た伊原の自然壕跡に『姫百合之塔』が建てられた。

報告が終わり、勉強会後半部分は沖縄戦に関する質疑応答の時間があった。具体的な内容として大東文化大学からの質問は『初版時は GHQ の統制下でなぜ発刊出来たのか』という質問に対し名城大学は『前書きによると出版社の新報社は【後世に残したいという気持ちが強かった】』回答していた。このような沖縄戦に関する様々な質問があった。

勉強会の最後に武田は、『名城大学が作成した報告書を読んで、沖縄戦が特殊な戦争だということを改めて感じた』と話し、名城大学准教授矢嶋光は『せっかくの機会なので自分の足で学んで、将来自分の子どもたちなどで沖縄に連れていき、記憶を継いでほしい』と話した後に、勉強会は終了した。

＝＝

（感想）沖縄戦については、元々ゼミや高校の修学旅行などで学習はしていたが、名城大学の報告書を読むと「第二次世界大戦(別名太平洋戦争など)の日本軍戦で最も残酷な戦い」だということを実感した。報告書の内容を改めて読むと、北部から次第に住民の土地だけではなく精神的に追い詰められていることを初めて実感した。特に印象に残ったのはひめゆり学徒隊の辺りである。平和に暮らしていていたはずの女学生が戦争で怪我した負傷兵の看護や死体処理・命懸けの水汲みや食料調達といった残酷なことを行うことになっていたと知ったときは、私の心が痛んだ。その中で【軍歌や流行歌を歌い、戦争の苛烈な現実から一刻でも逃避しようと試みた。】という報告書の文章を読み切ない気持ちになった。私がこの状況なら耐えきれる自信が全くないがそれでも看護活動などに従事できたのは、「それでも怪我人を助けたい」や「自分の身を犠牲にしてでもお国に貢献したい」などといった気持ちが女学生にあったのではないかと勉強会終了後に考えた。

近年では、戦争の高齢化が進み沖縄戦の惨状を伝えられる人が年々減少し、沖縄の観光地化が年々進行してきている。勿論観光地として栄えていくのも良いが、人々には美しい海を前に恐ろしくかつ残酷な戦争が起こっていたということをいつまでも忘れないでいて欲しいと、この勉強会を通して思った。

＝＝

６．キャンプコートニー視察（2 月 23 日）　　担当：前田　篤利

＝＝

視察場所：Camp Courtney（米海兵隊の駐屯地）
住所：〒904−2202 沖縄県うるま市天願 941

Camp Courtney は沖縄県うるま市にある米海兵隊の駐屯地である。この駐屯地には、第三海兵遠征軍の司令部が設置されている。海兵隊は有事（天災等を含む）が発生した場合に 24 時間以内など比較的速やかに現場に到着し、後続する米陸海空軍の本体が到着するまでの事前の準備（輸送路や電気障害などの復旧）を終了させ本体を迎えるのが任務の 1 つである。これを達成するために世界を 3 分割してそれぞれに海兵隊の部隊の派遣している。第三海兵遠征軍は、アメリカインド太平洋地域を対象として派遣された部隊であり、第 1 海兵航空団、第３海兵師団、第３海兵兵站群、第３海兵遠征旅団、第 31 海兵遠征部隊、第 3 海兵遠征軍情報群から構成されている。最大 19000 人近くの海兵隊員と海軍兵が沖縄県内にある計 10 か所の基地と航空基地に駐留している。隊員は、同盟国と２国間および多国間の合同訓練・演習に年間 65 回以上参加することにより、友好国の能力を構築し、強固な地域同盟と軍隊同士のつながりを形成・維持し、大規模な戦闘作戦から人道支援・災害救援にいたるまで様々な作戦を行う態勢を整えている。そのほかにも駐在する部隊や住人へのモラル、地域交流、安全そして防衛支援を提供するという重要なものを負っている。

そのような重要な役割についている Courtney という名前は、第二次世界大戦時の沖縄戦で戦死して名誉勲章を受賞したヘンリー・コートニー少佐にちなんで命名された。海兵隊の駐屯地の名前には名誉勲章を受賞したか隊員の名前が付けられていることが多く Courtney もまた同じように付けられている。

このような米海兵隊基地（以下米軍専用施設）は、日本国内に 130 以上あり、そのうち沖縄には日本国内にある米軍専用施設の全体の 70%、数字にすると 1 万 8000 ㌶という規模の敷地を有している。この 70%の基地は沖縄本島の約 15%の面積を使用しており、東京 23 区のうち 13 区を覆うほどの面積となっている。これには沖縄の負担面で社会的な議論がある。

お世話になった方

・米海兵隊 Camp Courtney 渉外官の梅原一郎さん

・米海兵隊中尉ドゥーリー・ジェイクさん（Camp Schwab 所属）

・米海兵隊隊員 KJ Thompson さん（Camp Courtney 所属）

スケジュール

第 1 ゲートで梅原さんと集合→ Courtney 内のレストラン TENGAN でサンデービュッフェにてランチ→Courtney ビーチを視察→別棟に向かい海兵隊についての説明→スーパー COMMISSARY に移動し店内を視察→カリーさん作成のステーキを試食→帰宅

＝＝

（感想）今回の梅原さんのお話も、これから社会で生きていく上で考えさせられたものでとても興味深いものだった。最初に相手に自分の名前を覚えてもらう方法として、奥さんに花束を渡すというものを紹介していた。これについては必ずしも日本人は花束を貰うことについて嬉しいと思う人がいるだけではないと考えるため、相手の記憶に残る物の送り方に気をつけることが重要であると感じた。その後に、伺った話に地域との交流のお話があった。ここで、最近警察などの組織との連携関係が悪化しているというものがあった。これは仕事の仕方や組織の内部の人間の縄張り意識の問題のようにも考える視点がある一方、仕事をしている中では融通をきかせ合うという臨機応変さと互いの信頼関係を築いていくことの重要性を再度認識することができた。

また、これは去年の夏に行った summer school の話だが、Camp ごとに地域交流を重要視しているということを知ることができ、本土でやっているニュースの内容が完全に正しいわけではなく、基地と周囲の人々がうまく交流をしながら生活できていることを知ることができた。特に Camp Schwab に行った際に辺野古区長のお話を伺い実感することができた。そのことから、情報も 1 つの媒体からではなく多面的に見ていく必要性を学ぶことができた。

最後に、梅原さんからは毎回興味深いお話を伺い、今回は海兵隊員とも交流をすることができた。今後も何か機会があれば伺う追うと考えている。最後にカリーさんに教えてもらったアメリカ流のステーキの焼き方である。焼いた後にチップで燻す。一般的な家では難しいかもしれないが、燻製機を買うなどして試行錯誤していきたいと考えている。

＝＝

７．遺骨収容活動初日（2 月 24 日）　　担当：福島　伊織

＝＝

開催場所: 沖縄県南部某所

主催: 特定非営利活動法人 空援隊

この日、内田真一さんを隊長として、大東文化大学（＋名城大学）チームとして、遺骨の収容を行った。大東文化大学チームには、内田さんのほかに、陸上自衛隊の第 15 偵察隊の構井さんと平井さんが加わった。

最初は壕を探すところから始まり、内田さん、構井さん、平井さんが草むらの中に入っていきながら探す作業となった。道が開けてもいない草むらの中に突っ込んで行き、草木をなぎ倒しながら道を作りながら壕を探す作業であった。我々素人には到底できないような作業を目の当たりにし、陸上自衛隊のレベルの高さを痛感した。壕が見つかった後は次々と豪の中に入っていき、土を掘り進めていたが、遺骨収容を経験している皆さんがどんどん進めていくため、初体験であった私と武藤くんが少し置いていかれる形になった。来年遺骨収容を行う際は、初体験の人たちに説明を行い、間に入り壕の中での作業に誘導する役割を担おうと思った。

午前中は掘り出した岩と土を入口付近に積み上げて、ダムのような物を作っていった。構井さん、平井さんが 1 番奥を掘り進め、周りを我々が掘り進める形になったが、大きな岩を退かしながら、淡々と掘り進めていく陸上自衛隊のお二方の姿をみて、再び陸上自衛隊のレベルの高さを実感した。

午前中は遺骨や遺留品は見つからず、午後には埋め戻し原状回復を行う方向で、昼休憩に入った。午後になり、埋め戻す前に内田さんに最終確認をお願いしたところ、遺骨と金属片が発見された。古墓である可能性もあるとのことだったが、骨が出てきたことによって、収容作業が継続されることとなった。

陸上自衛隊のお二方を中心にローテーションで交代しながら掘り進めていく形となった。空気が回りにくい深さになっていたのと、頭を低い位置に起きながらの作業となったため、我々素人は交代が必須であったが、陸上自衛隊のお二方は常に中に入り作業していたため、プロの格の違いを見せつけられた。初日は壕の中を掘りきる前に時間が来たため、残りの作業は翌日に持ち越しとなった。

＝＝＝

（感想）初日の作業を通して感じたことが 2 つある。1 つ目は陸上自衛隊のレベルの高さである。歳が近いお二方との作業となったが、草むらの中に入っていき道を切り拓く作業、大きな岩を持ち上げ移動させる作業、空気が回らないなか長時間壕の中で掘り進める作業、全てにおいて格の違いを感じた。自衛隊には陸上だけでなく、海上自衛隊、航空自衛隊があり、陸上自衛隊の中でも複数の隊があるため、今回目にした陸上自衛隊の姿は一部だけだが、この一部だけでも自衛隊のレベルの高さが伺え、国を守る組織として、非常に頼もしいと思った。今までも自衛隊には敬意を評していたが、改めて自衛隊への尊敬の気持ちが強くなった。

2 つ目は遺骨収容を行う意義を考えさせられた。私たちは、日本で戦争が起きていない時代を生きているため、普通に生活していれば、骨はお墓に納骨してもらうことができる。しかし、80 年前の戦争の時代には、骨をお墓に納骨してもらうことは当たり前ではなかった。沖縄は、沖縄戦で戦った英霊だけでなく、住民も戦争に巻き込まれ命を落とした土地であり、多くの遺骨が今もなお発見されず、土の中に眠っている。そのような状況の中で、遺骨を掘り出して太陽のもとに出すこと、そしてその壕に遺骨がないことを証明することは、戦争のない今の日本に生きる私たちができる最大の弔いであると感じた。

次の遺骨収容も、今の時代を生きる日本国民として、英霊や戦争で死んで行った人々に対して哀悼の意を表しながら、作業したいと思った。

＝＝＝

８．遺骨収容活動 2 日目（2 月 25 日）　　担当：菊池　優捺

＝＝＝

１日目の終わり頃に多くの遺骨が見つかり、２日目も引き続き同じ壕で遺骨収集作業を行った。

１日目と同様に壕内で遺骨や遺品を含む土砂を収集、地上へ運搬し、次に土砂を篩にかけ選別作業を行った。掘削作業はねじり鎌などの小さな器具を使用して丁寧に行い、遺骨や遺品を崩さないように心がけた。

選別作業では土砂が粘土質なため篩の効果があまり得られず、手作業で行うことが多かった。欠けてしまった遺骨は、石や珊瑚、劣化した木と類似しており遺骨収集初心者には判別が難しく、ベテランの方に確認してもらう場面が度々見られた。初めは、石や珊瑚と判定されることが多かったが、終盤には遺骨の特徴を学び、判別することができていた。

午前中の中盤に掘削作業をしていると、土砂から黒い物体を発見した。恐る恐る掘り進めていくと、成人男性の両手より大きい鉄板のようなものが出現した。午後には取っ手も出現したため、鍋のようなものではないかと言われていた。他にもお酒かジュースの瓶な度も出現した。壕の中はとても狭いため、基本的に 1 名で掘削作業を行った。壕内で収集した多くの遺骨を最後に並べた。

１年間、遺骨収集に向けて戦争についての歴史を学んできたが、教科書や映像ではわからなかった戦争の現実を肌で感じた。

壕内で遺骨を発見するたびに見つけてあげることができてよかったと思う反面、これ以上見つからないといいなと思った。自分の手で遺骨を拾い上げると、この方にも自分と同じように家族がいたのだと考えさせられた。特に小さい子供の歯が発見されたときは戦争の悲惨さを目の当たりにし、言葉を失ってしまった。

今回の遺骨収集を通して、より一層、平和への願いが強くなった。二度と戦争を起こしてはいけないと心から思っただけではなく、戦争の歴史を次世代に伝えていかなければならないと感じた。また OG として遺骨収集に参加したいと思う。

＝＝

９．ひめゆり平和祈念館・平和の礎　　担当：川崎　直輝

＝＝

視察先①：ひめゆり平和祈念資料館
〒９０１―０３４４　沖縄県糸満市伊原６７１―１
視察先②：平和記念公園
〒９０１―０３３３　沖縄県糸満市摩文仁

その後、14 時に遺骨収集作業を終え、ひめゆり平和祈念資料館と平和の礎へ行った。ひめゆりの塔は、沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の生徒や教師のための慰霊碑である。ひめゆり平和記念資料館は、沖縄戦の体験と平和の尊さを伝える為に設立され、証言映像、実際に使用していた所有物、当時の写真などが展示されていた。私たちは、２５日の午後ひめゆりの塔、平和記念資料館を訪問した。

平和の礎は、沖縄の歴史と風土の中で培われた平和のこころを広く内外に伝え、世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ記念碑で、大田昌秀県政に戦後５０年を記念して建設された。

（感想）ひめゆりの塔、平和記念資料館を訪問して、テレビの特集があったり、勉強会のなかでもひめゆりのことについて書かれていたり、知っていましたが、ひめゆりの方の証言、資料を見て私が思っていた以上に悲惨で過酷だったことを学びました。その中で印象的だったことが２つあります。

一つ目が病気になった患者には水を飲ませなかったこと、病気になった患者は、水を飲ませてくれないことに対しひめゆりの学生に尿をかけて当たったことです。私は、病気になった患者には水を飲ませないことを初めて知りました。人は水を与えないと死ぬ、飲ませないことは見捨てていることになるので、それだけ水がなく逼迫した状況で戦っていたことが読み取れました。また同時に人間を駒としてしか思っていないと思いました。ひめゆりの学生は、水を飲めない死ぬことが確定している病人に尿をかけられてまで看病することの意味って何なのかなと思いました。

二つ目は南部に拠点を撤退させる際に、学生たちには後に車を乗せて撤退させると嘘をついて、動けない学生や軍人に対して青酸ミルクを飲ませていた点です。嘘をついて人を殺していく人間の所業ではないと思いました。ひめゆりの学生の過酷な生活を見て改めて戦争をしてはならないと強く感じさせてくれる資料館でした。

平和の礎の方は、『平和の礎はいかにして創られたのか』を読んだ後、実際に訪問することになりました。沖縄戦で亡くなられた氏名の記念碑の素材、平和の礎の形、創られるまでの過程など本で学ばないと気が付かない着眼点に気付き実際に見て確かめることが出来たので再度訪問することでまた新たな学びになりました。訪問した現在でも新たな記念碑に沖縄戦で亡くなられた方の氏名が書かれており、遺骨収容で戦没者のお骨が発見された時もそうですが、まだ沖縄戦は終わっていないことを痛感させられました。平和の礎があることで、私たちは沖縄戦を忘れずに後世に伝えることができ、沖縄戦で亡くなられた遺族の方が会える場所を提供していることを改めて実感できました。

＝＝

１０．沖縄そばの会　　**担当：川崎　直輝**

＝＝

開催場所：沖縄そばと海産物料理の店楚辺　沖縄県那覇市楚辺２丁目 37―40

ゼミ活動最終日の夜に集まり楚辺そばで、沖縄そば、ジューシーを食べました。食べ終わった後には、両教授、武田ゼミを代表として、前田ゼミ長、福島さん、矢嶋ゼミを代表として福安さんからお言葉を頂きました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（感想）遺骨収容後で疲れている中でしたが、全員が参加し沖縄そばを食べることが出来て嬉しかったです。４日間ほんとにあっという間で、代表者のコメントを聞いていてもゼミ合宿が実りのあるものであったと分かるスピーチでした。沖縄そばは、スープが何度でも飲みたくなるほど美味しくジューシーもお替りをしている学生がいるぐらいどれも美味しかったです。特に印象に残った

シーンは矢嶋先生が学生の機会があれば会いましょうという言葉を機会があればではなく必ずまた会うんだ的な事をおっしゃっていたところです。またこのメンバーで沖縄で集まりたいそう思わせる沖縄そばの会でした。

＝＝

おわりに：ゼミ長から　　前田　篤利

＝＝

私は1年間のゼミ、そしてゼミを締める合同ゼミ合宿を通して多くのことを学ぶことができました。ゼミでは太平洋戦争並びに沖縄戦に関する何冊かの本読むことで日本軍の視点や米軍側の視点、そして住民側の視点を通した戦史を学び、今まで小中高生で学んできた歴史より深く広く学ぶことができたと考えています。また視点の違いについて、１つの出来事について、多くの人の視点による事実があり、１つの視点について理解したとしてそれが必ずしも事実を正しく認識したということにならないということ、そしてその視点の違いにより問題についての前提条件や望む結果にも違いが生じ、その違いを認識していないことから問題が平行線を辿ることにもなるということも学びました。それを防ぐためにも相手の目線に立つという問題解決において根源ながら忘れがちになってしまう非常に重要なことを学び直すことができました。

そして合同ゼミ合宿では、フィールドワークの重要性について改めて認識することができました。ゼミや合宿中の勉強会ではひめゆり学徒隊などを含める戦史を学び、実際にひめゆり平和祈念資料館を訪れたり、遺骨収容を行いました。ひめゆり平和祈念資料館は高校生の修学旅行でも訪れましたが、その時とは違く多くの本などで学んでから訪れたからこそ戦争による住民の被害や悲惨な惨状について身が竦む気持ちになったのだと思います。そして遺骨収容について、私自身は2度目の参加でしたが、壕を探索し実際に骨を取り上げるという体験を今回初めてすることができました。骨を取り上げた瞬間は言いようのない気持ちでしたが、遺骨収容の活動を今後も続けていかなければならないと思わせるには十分なものでありました。これらの体験したことは決して紙や映像、音声などの記録を読む聞きするだけでは得られないものであり、フィールドワークをしたからこそ感じられたことだと思っています。

最後となりましたが、今回の合同ゼミ合宿を企画して頂いた武田知己教授、合同ゼミ合宿に参加して頂いた名城大学矢嶋光准教授並びに矢嶋ゼミのゼミ生の皆様、またあらゆる箇所でご尽力頂いたOBOGやお世話になりました皆様、そして1年間多くの学びと経験を共にした武田ゼミのゼミ生の仲間たちに感謝申し上げます。

また皆様とそして今後武田ゼミ、矢嶋ゼミに入るであろう新たな仲間と共に沖縄での再会し、多くの経験や盃を酌み交わせますように願っております。

＜gallery＞

（左）二日目の壕に入る瞬間。　（右）ここから 5 柱が発見された。

また逢う日まで。

発行日：2025 年 3 月 24 日
編集：秋山　翔哉・前田　篤利
発行者：武田知己ゼミナール
住所：〒355-8501　埼玉県東松山市
岩殿 560　大東文化大学東松山
校舎　4-308　武田知己研究室